

## 第2回品川区子ども読書活動推進計画策定委員会 議事要旨

日時：令和6年7月17日(水)

場所：品川図書館4階 視聴覚ホール

傍聴者2名

### 【委員】

出席：島田委員長、米田副委員長、平嶋委員、古里委員、吉田委員、伊藤委員、  
巻島委員、丸山委員、鶴田委員、尾上委員、蜂屋委員、柳岡委員

欠席：飯作委員

### 【事務局】

出席：中島保育施設運営課長、石橋品川保健センター所長、丸谷教育総合支援センター長、  
唐澤特別支援教育担当課長、河内品川図書館長

欠席：藤村子ども未来部子ども育成課長

### 【その他】

品川図書館事業担当 担当者4名、策定支援業務受託事業者 担当者1名

- 1 開会
- 2 委員長挨拶
- 3 議事

#### (1) 計画体系案の検討

(事務局) 資料1-1、1-2を説明。

(委員長) ご意見、ご質問はあるか。前回ご欠席された委員お二人の現場における読書という観点からの課題を踏まえてご意見等あるようでしたらいただきたい。

(委員) 学校の課題は、子どもが読書から離れていること。本校の生徒にどうして本を読まないのかを聞いたところ、「面倒」「手間がかかる」と返ってきた。何が面倒かをきくと、「本を買う」「借りる」等の移動、手に取るまでの過程が面倒、スマホならすぐに見られるのに、とのことだった。アイパッド等で電子書籍を使えるようになったらと聞くと、「興味がある本を見られる」という前向きな声が聞かれた。本を紹介するバナーや動画があったらどうかと聞くと、「その方が本に対してとっつきやすく、ハードルは下がる」と話していた。読むこと自体は大事なことで必要、役に立つと感じているが、なかなか一步を踏み出すことができないといったことを聞き取ることができた。概ね多くの生徒がそう感じていると思う。本校は、ラーニングセンターという形で、オープン書架のいわゆる図書室が充実している。教員がお薦めする本を、なぜお薦めするのかを書いたPOPと共に展示したりしている。それでも、読書好きの子には刺さるが、それ以外の子どもたちが本を手には取ることはない。そのあ

たりどうしたものかを皆さんと議論したいと思う。

(事務局) TikTokクリエイター「けんご@小説紹介」さんが本を紹介すると、大人の本が重版されるくらいに売れる、TIKTOK 売れということが起きる。普段本を読んでいない方が書店に行って本を買うことも起こる。図書館でも一生懸命、本の紹介をしているが、なかなか特定の人以外には響かない。今の子どもに響くような新しいチャンネルが必要なのだろうか。愚直に進めるだけでは駄目なのか。

(委員) 入口として、そうしたインフルエンサーからの情報は、子どもたちには非常に早く入ると思う。ただし、地道な活動が形にならないとは思っていない。少しずつ本を読むように働きかける活動も大事だと思う。短期的な結果を求めただけでは、なかなか難しい。

(委員) 本を買ったり、図書館に行ったり等の物理的な面での大変さもあるが、そもそも読書活動そのもの、知への探究への面倒臭さもあると思う。自分から求めていかなければいけない点で精神的にハードルが高い、そういう気持ちが高校生にはあるかもしれない。ただし、少し揺さぶりをかけると、途端にのめりこんでいくような、新しい層の開拓ができる。それを、現場の学校は、小学校、中学校、高校、どこも同じだと思うが、常に試行錯誤しながらやり続けている。地道な活動が無駄ということは決してない。一方で、より即効的・効果的なものとしてネットやSNSを活用した働きかけは、身近に入り込むという点で確かに有効だと思う。私どもの学校では、毎朝始業前10分、読書活動をしているが、それだけだと読まされている感じになる。何とか主体的に読んでもらう活動として、司書、司書教諭の知恵の出し比で、それぞれのクラスにお薦めの本を、出張図書館として可動式の棚で教室に持って行って並べたり、校内ビブリオバトル等を行ったりしている。また、本校には、夜間定時制もあり、様々な学力差がある生徒を包括している。その中には、ディスレクシアの生徒もいるし、様々なバックボーンをもった生徒に向けて、夕飯（給食）の時間に、定期的に、校内放送を使い、小説の読み聞かせをしている。そうした活動をした方が、子どもたちの読書率が上がる。地道にやることは決して無駄ではない。

(事務局) 品川区は、エコルとごしのジオラマを作ってもらうなど、大崎高校のジオラマ部の生徒に大変お世話になっている。事細かな指示を待つことなく、生徒自らが先を読みツボを押さえて取り組まれていたのが非常に印象的だった。有機的に動けることに感心したが、子どもさんへの指導・指示をする際に心がけていることはあるか。そうした活動をする子どもは、同じ世代が動くことへの刺激になると思う。

(委員) 学校では、こういうアイデアもあるよと教職員から提示することはあるが、やってみるのは生徒の主体。そういう気付きは、中学校までの教育の成果や家庭での教育の成果だと思う。

- (委員長) ここで、体系案について考えるにあたって、参考資料として資料4・5について事務局から説明をいただきたいと思う。
- (事務局) 資料4、5を説明。
- (委員長) ご意見、ご質問はあるか。
- (委員) 地域活動と学校図書館の両面で読書活動に関わっている。学校図書館では、司書の勤務時間が短いのでできることが限られる。毎日勤務できないと、学校図書館の発展はない。司書の仕事はとても重要。子どもたちとの信頼関係を作るためにも、同じ司書が毎日いることが重要になってくる。地道な活動だが、司書の勤務時間を延ばすことを前向きに検討していただきたい。また、書籍の購入予算が学校によりマチマチで小さな学校がなかなか購入できないので、そういうところを電子書籍で代用できると良い。公共図書館に行く機会がないという意見もある。学校図書館で事足りているという面もあるとは思いますが、公共図書館が学校へ出向いて生徒向けのオリエンテーションをやってみてはどうか。それから「バリアフリー図書館の森へようこそ！」の品川版を作っていただきたい。
- (委員長) 「バリアフリー図書館の森へようこそ！」の品川版というのは一つのアイデアとして良いと思う。まずはWEBサイトを作って関連のリンクを貼るところからスタートするのも違うのではないか。
- (委員) 先日、コミュニティスクールデーで数名の生徒たちと図書館利用や読書を進めるにはというテーマで話し合いをした。ここ数年で貸出冊数が減少しており、その理由や子どもたちの感じているところを把握することを目的に実施した。参加した生徒は、生徒会の生徒で、比較的学校内で活発に活動をしている子どもたち。月に3～5冊の本を読みたいという目標を持っているが、学校図書室に行く時間がない。子どもたちからの要望としては、司書が毎日いて、アドバイスをしてほしい。自分が読みたい本があるのかないのか自分では分からないので何とかしてほしい。もっと新しい本を読みたい、勉強したい人と本を読みたい人が同居するとうまくいかないのが、静かなところで本を読みたいという声もあった。浜川中学校からは、どこの公共図書館も遠いので、本を好きな子でなければ、本に触れる機会が少ない。公共図書館から学校に来てもらえると嬉しい。また、外国籍の生徒がここ1～2年で増えているが、その子たちが読める本がない。購入する方法が面倒で高価で、なかなか仕入れることができない。朝読書の時間に読む本がないという気の毒な状況になっている。公共図書館が遠いので、近所のどこかの空きスペース、地域の商店街でも良いので、まちの図書館という形ができると良い。そこで、子どもたちがボランティアとして運営に参加できると良い。
- (委員長) 外国語の本を必要とする子どもたちへのサービスとしては、ICT技術を活用するというのも有効だと感じた。
- 体系案の高校生世代の目標のところ「情報リテラシー」とあるが、文部科学

省では情報リテラシーは大学からのキーワードになる。その前の高校生世代は「情報活用能力」になっている。意味合いはほぼ一緒だが、なぜか日本ではこのようになっている。「様々なリテラシー」という形にしてしまえば、メディアリテラシーやICTリテラシー等色々あるので、そこを検討した方が良い。

(委員) 今回の計画のキーワードは、子どもたちの主体的な読書を促すことだと思う。今は、大人がどのようにして子どもに本を読ませるかという視点で書かれているように思う。子どもたち本人が、どういうふうにしたら面白いと思うのかを把握する仕掛けがあると良い。対象別目標の中身についても、子どもに携わせるような取り組み・ニュアンスが入ると良い。また、AかBの目的を受けた言葉が、目標にあると良い。さらに、4つの策定の視点のどこと対象別目標がリンクしているのかが分かると良い。

MottoSokka!を、無料で体験できたときは非常に良かったが、無料期間が終わったら非常に高くして諦めたという話を聞いたことがある。利用して校内研究をしている国立の小学校があると聞くので、研究発表を見に行きたいと思っている。

他区から異動してきたが、学校図書館には、毎日司書がいると思っていたのに、品川では毎日いない。子どもたちが調べ学習したい時にも、司書がいなくてアドバイスがもらえない。司書には、毎日いていただけると非常にありがたい。子どもたちが大人になったときに、読書を続けていく環境が整っていることが必要。月に1回とか2回でも出張図書館的に借りる・返すが駅近でできると良い。仕事の帰りに借りることができる環境が整っていると、品川に住もうと思うのではないか。

(委員) 今回の体系案は、非常に意欲的で広がりをもたせたものと思う。一方、ここまで広げると、現実的にどういう風にやっていくのかを考えると、相当に厳しいものがある。実現すべきものと、将来の課題にすべきものとの区別をするのかどうか。現実的に誰がどこでどうやるのかが重要になってくる。幹になるものはどこなのか。子どもたちがデジタル図書に親しむことと、デジタル情報に接することの違いを分かっているのかどうか。そこをどう育てていくのかが課題。現在のデジタル環境の中で、リテラシーを高めていくことは必要なことだが、一方で、日常的な社会とのつながりが欠落してしまっているのはどうなのか。区立図書館でPOPバトルというのを毎年7～9月にやっているが、学校に馴染めない中学生がいて、その子がPOPに応募したら、図書館司書賞をもらい、自分が社会とつながっていることを実感できたという話を聞いた。人と人の触れ合いと、本を提供する。図書館サービスをしなが、人として子どもに接して、社会とのつながりを子どもたちと一緒に育てていく。デジタル化の中で拡散していく状況の中にいる子どもたちに幹があることを知らせていくのが図書館の活動。必要なことなので書かざるを得ないということは分かるが、これだけ大きく広げると、どう順序だてて

やっていくのかを考え、根幹の部分を失わないようしっかりとした体系にしておかないと、さて何をやるのか分からないといった計画になってしまう。  
(副委員長) 分かりやすさ、誰が見ても分かるということを意識して作成してほしい。体系ではないところになるかと思うが、例えば、不読率やディスレクシア等について、かみ砕いて説明し、誰にとっても分かりやすい計画にしてほしい。  
(事務局) 目的A、Bのまとめ等については、委員長、副委員長、事務局で再考して、作り直していきたい。  
(異議なし)

(2) 有識者ヒアリングについて

(事務局) 資料2を説明。  
(委員長) ご意見、ご質問はあるか。  
(特になし)

(3) ワークショップについて

(事務局) 資料3を説明。  
(委員長) ご意見、ご質問はあるか。  
今回の課題の一つとなっている多様性を尊重した取り組みについても、生徒さんたちの話を聞いていただきたい。  
(委員) ワークショップに参加する人は、本が好きな人のイメージ。本を読んでいない人の意見や気持ちをどのように把握するのか。  
(事務局) 基本、本が好きな方が参加されると思うが、その方々が本に入るきっかけをヒントにしたいと考えている。いろいろな方が、何らかのきっかけで本の世界に入っていったと思うが、そういう生々しいご意見の中からヒントを得られればと思う。  
(副委員長) 本を読んでいない人の意見は、アンケート調査結果でも把握できるのではないか。

(4) その他

(特になし)

4 連絡事項

第3回策定委員会は、令和6年8月のお盆後を予定している。

5 閉会